

今週のお薦めレコード

管弦楽曲の優秀録音



このレコードを聴きたい

第8049番 税込み4400円



シュトラウス・ワルツ集 美しき青きドナウに、春の声
皇帝円舞曲、ウィーンの森の物語、ウィーン気質
フィラデルフィア管／オーマンディ
米コロムビア／MS6217／1959年録音／ステレオ／G
劇場のコンサート・マスタであったオーマンディは代役
として指揮台に立ったことで指揮者の道が開けたことは
トスカニーニに似る。ラッキー・ボーイのこの演奏にはウ
ィーンの演奏家のスマートさは無い。だが、アメリカ人は
ボスコフスキーの演奏以上にこれを愛しただろう。貴族
趣味とか気取りが無く、豪華な音の洪水と悦楽にも近い
楽しさに包まれているのだ。彼らはもはやヨーロッパに興
味を抱かない。アメリカが最も親しめる音楽の世界がこ
こにある。ウィンナ・ワルツでなく、アメリカン・ワルツで結
構。感覚はスーザの行進曲と同じで、胸が透くようなリズム
と輝きに包まれたワルツの世界！（山田）

第8050番 税込み4400円



ワーグナー ワルキューレの騎行
トリスタン第1幕の前奏曲、ジークフリートの葬送行進曲
ロス・フィル／ラインズドルフ
米シェフィールド・ラボ／LAB7／1977年録音／G
ダイレクト・マスター・プレス。優秀録音盤。
ラインズドルフはもしアメリカに渡っていなければバイロ
イト音楽祭で振っていただろうと私は思う。むしろ、その
姿が望ましい。ウィーンで生まれた彼がメロポリタン・オ
ペラにデビューしたのは『ワルキューレ』であり、生涯ワー
グナーは大切なレパートリーだった。“騎行”は言っ
てみれば“凱歌”である。勝利を称える音楽だから胸の空
くような快感こそ望ましい。ここに聴かれる演奏こそその
頂点と言って良い。いつか放映されたラインズドルフの
ワーグナー演奏は実に見事だった。美しく、良く鳴る、腹
の底までずっしりと届いてくる重みもあった。（山田）

第8051番 税込み3300円



ラモー 組曲『優雅なインドの国々』
シャペル・ロワイヤル管／ヘレヴェッヘ
仏ハルモニア・ムンディ／HM1130／1983年録音／G
優秀録音盤。

この録音が発売になった頃、私より年下の者が活躍す
るようになったと思った。ヘレヴェッヘ（フラマン語）は押
しも押されぬ大家に成長したが、この録音の頃から急激
に知られ始めた。これを聴けばすぐに分かることだが、
演奏に全く無理がなく極めて素直なのだ。まるで目の前
で演奏しているような名録音で、聴く者は王宮でのコン
セールを肌で感じる事が出来る。シャペル・ロワイヤル
管はヘレヴェッヘが手塩にかけて育てた楽団で、意の
ままに音が生まれてくる。レオンハルトやアーノクル
の跡を継ぐ名指導者ヘレヴェッヘの誕生を意味するの
がこのレコードであると言って良いだろう。（山田）

第8052番 税込み3300円



アンタイル バレエ・メカニカル、ジャズ・シンフォニー
オランダ管楽アンサンブル、ヴェラ・バス(vn)
ラインベルト・デ・レーウ(ピアノ)と指揮
蘭ハーレキ／2925524／1976年ライヴ録音／G
長鉄ディスクに選ばれた優秀録音盤。

ストラヴィンスキーに影響され、更に前衛的趣向を凝
らした作品が代表作「バレエ・メカニカル」。1927年、カ
ーネギー・ホールでの初演では騒動を巻き起こしたよう
だが、「春の祭典」でもそうであったように新しいもの
には非難が付きものだ。エネルギーの爆発の連続のよう
な作品だが、その中に私は演奏家の冷静さを感じる。こ
のような作品に演奏家の共感ほもとより、冷めた感覚が必
要となる。決して驚かすのが作曲家の狙いではない。
世の中への不満とか憧れとか絶望などがこうしたデフォル
メされた形で吐き出されるのだろう。（山田）